里耶秦簡8-660簡釈読覚書

石原遼平

『里耶秦簡(壱)』[[1]](#endnote-1)で公開された8-660簡は報償の受け取りに関連して、都郷から県廷に送られた文書だと考えられる。この簡は図版によって現行の釈文を修正できる部分があるため、以下にこれを示して当該簡を利用する者の参考に供したい。

1. 現行釈文

『校釈１』[[2]](#endnote-2)の釈文に何有祖[[3]](#endnote-3)の指摘を加えたものが、現在最も精度が高い釈文であるため、ここに引用する。

卅（三十）五年八月丁巳朔丙戌，都鄉守〼

士五（伍）兔詣少内，受購[[4]](#endnote-4)。●今□〼 　（8-660正）

*九月丁亥日垂入，鄉守蜀以來。瘳*〼 　（8-660背）

2. 新たに校訂できる文字

現行釈文では正面2行目末尾の文字は未釈読を示す「□」とされている。図版によれば当該字は〔図①〕のようになっており下半が欠けている。残存部分を8-2217や8-1090等の「遣」字と比較すると同じ形状であることがわかる。また、文脈からも「遣」で不自然な点はないため、「遣」と釈読して問題ないであろう。

 〔図①〕遣（8-2217）遣（8-1090）

３. 校訂後釈文

校訂後の釈文は以下のようになる。

卅（三十）五年八月丁巳朔丙戌，都鄉守〼

士五（伍）兔詣少内，受購。●今遣〼 （8-660正）

九月丁亥日垂入，鄉守蜀以來。瘳〼 （8-660背）

附記：小文は、アジア・アフリカ言語文化硏究所共同利用・共同硏究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る――中国古代簡牘の横断領域的研究（３）」における議論を踏まえているほか、科学硏究費（基盤硏究B、課題番号16H03487）「最新史料の見る秦・漢法制の変革と帝制中国の成立」の硏究成果を含む。

1. 湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡（壱）』文物出版社、2012年1月。 [↑](#endnote-ref-1)
2. 陳偉主編，何有祖、魯家亮、凡国棟撰『里耶秦簡牘校釈（一）』武漢大学出版社、2012年。 [↑](#endnote-ref-2)
3. 何有祖〈読里耶秦簡札記（二）〉（簡帛網、2015年6月23日、http://www.bsm.org.cn/show\_article.php?id=2257） [↑](#endnote-ref-3)
4. 「購」は原釈文および『校釈１』は未釈読であった。何有祖は注２札記において図版から「購」と釈読できることを指摘している。 [↑](#endnote-ref-4)